

HISTORY

一世紀の時空を超えて



明治時代の銀板写真に当時の巨大な灯籠の姿が残されている。

文献によると、天保時代（1830年～1844年）に作られた名古屋城を模した城郭型灯籠が好評で、以後毎年のように作られるようになったと言われている。当時の灯籠は、高さは五丈八尺（17・6m）幅は三間四方（5・4m）もあった。

能代七夕「天空の不夜城」協議会事務局
https://noshirotanabata.com

嘉六

愛季

いいこと
3

まつり

開催
8月初旬



動画もチェック

天空の不夜城に圧倒される

NOSHIRO IIKOTO 11 NO KOTO

高さ日本一

能

代の有名な祭りのひとつが能代七夕「天空の不夜城」である。



「天空の不夜城」協議会
灯籠製作責任者 小嶋 将さん

日暮れ後の市街地、漆黒の闇を打ち破る色鮮やかな灯籠が2つ。灯籠はお城の形をしており、どちらも屋根根の上にシャチが乗っている。驚くべきところはその高さ。24・1メートルの「愛季」と17・6メートルの「嘉六」で、「愛季」は城郭型灯籠としては日本一の高さを誇る。天にも迫る勢いの高さにあわせ、夜を感じさせない灯籠の明かりは、まさしく天空の不夜城。さらに灯籠の重さが25トン前後でありながら人の手で引いているというのだから、また驚かされる。

お囃子、太鼓、鉦の音からなる空気の振動や、引手の掛け声の熱気と合わせ、2基の大型灯籠が迫ってくる姿は圧巻。

さらに、灯籠の豊かな色彩が見る者を魅了する。

言い伝えでは、能代七夕の起源は1300年ほど前、戦いの際に夜の川へ灯籠を流したことからはじまる（諸説あり）。近年では、全ての灯籠が9メートルほどの高さであるが、100年ほど前、五丈八尺（17・6メートル）の高さの灯籠があったという。その記録をもとに、市民有志で2013年に大型の灯籠を作製した。現在では8月初旬に「天空の不夜城」が市街地を練り歩き、8月上旬には伝統的な能代七夕（ねぶながし）が運行されている。

愛季
24.1m

嘉六
17.6m

人
1.7m

